

新約聖書の中の祈り 第16回

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「書簡における祈り」・・・パウロの書簡の中から、23の祈りの事例を見る。本日は、第1から第5の、5つの事例。

1. ロマ1:8~10 まず初めに、私はあなたがたすべてについて、イエス・キリストを通して私の神に感謝します。全世界であなたがたの信仰が語り伝えられているからです。私が御子の福音を伝えつつ心から仕えている神が証ししてくださるのですが、私は絶えずあなたがたのことを思い、祈るときはいつも、神のみこころによって、今度こそついに道が開かれ、何とかしてあなたがたのところに行けるようにと願っています。

(1) 文脈

- ① ローマの教会は、パウロの宣教によって始まった教会ではない。
- ② 当時、ローマには多くのユダヤ人が住んでいた。紀元30年の五旬節の日、エルサレムにて聖霊が降臨して教会が誕生したとき、多くの国外在住のユダヤ人たちもその場に居合わせた。そして、ペテロの証言によって、イエスをメシアとして信じた者が大勢いた。その中にはローマから来ていたユダヤ人も含まれていたであろう（使2:10）。彼らがローマに帰ってから形成したグループが、ローマの教会であったと推定される。
- ③ パウロはローマの教会にはまだ行ったことがなかったが、彼らのためにいつも祈っていた。

(2) 祈りの内容

- ① 神に感謝をささげる祈り・・・8節「私はあなたがたすべてについて、イエス・キリストを通して私の神に感謝します」。その理由は、「全世界であなたがたの信仰が語り伝えられているからです」、彼らの信仰の証言がローマ社会全域に知れ渡ったからである。
- ② 願い求める祈り：パウロがローマの教会を訪問できるように・・・その理由は、11~12節に記される。「私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでも分け与えて、あなたがたを強くしたいからです。というより、あなたがたの間であって、あなたがたと私の互いの信仰によって、

ともに励ましを受けたいからです。」

- (3) この祈りの事例から学ぶこと・・・まだ訪ねたことのない教会や、会ったことのない信者たちのために祈ることが、あり得る

2. ロマ 15 : 30~32 兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によってお願いします。私のために、私とともに力を尽くして、神に祈ってください。私がユダヤにいる不信仰な人々から救い出され、エルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるように。また、神のみこころにより、喜びをもってあなたがたのところに行き、あなたがたとともに、慰みを得ることができるように、祈ってください。

- (1) パウロの求め・・・パウロは、ローマの教会に対し、「私のために」、そして「私とともに」祈ってほしいと求めた。
- (2) 文の構成・・・日本語訳では、下線部の「私たちの主イエス・キリストによって、また御霊の愛によって」の部分は、「お願いします」につながっているが、原文では、二重下線部の「私と共に力を尽くしてください」につながる。そして、原文の構成は次のようになる。
- ① 何に力を尽くすかという点、『私のために祈ることにおいて』
- ② 誰に祈るかという点、『神に向かって』
- (3) ここから、祈りについてわかること
- ① 祈りの宛先は、父なる神である・・・『神に向かって』
- ② 祈りは、主イエス・キリストの名によって祈る・・・『私たちの主イエス・キリストによって』
- ③ 祈りは、聖霊の力によって祈る・・・『御霊の愛によって』
- (4) 「私とともに力を尽くして」・・・誰かのために祈ることは、『その誰かとともに力を尽くす』、その人といっしょに労苦することである。パウロは、ローマの教会に対して、自分のために祈るように頼んでいるが、それは自分とともに労苦することである、と言っている。
- (5) 祈りの内容 3つ
- ① 「ユダヤにいる不信仰な人々から救い出されるように」・・・ユダヤには、イエスをメシアでないとして教会を迫害するユダヤ人たちが多くいた。彼らは特にパウロの命を狙っていた。パウロがユダヤに滞在する間、彼らから守られるように。これは切実な祈りであった。
- ② パウロがエルサレムに行く目的は、異邦人からささげられた献金をエルサレムの貧しいユダヤ人信者たちに届けるためであった（ロマ 15 : 25~27）。この捧げものがユダヤ人信者たちに喜んで受け入れられますように。
- ③ 神のみこころにより、パウロが喜びをもってローマの教会を訪問できるよう

に、そしてローマの教会の信者たちとともに憩いを得ることができますように。

- 「あなたがたとともに、憩いを得る」と訳されているが、ギリシヤ語では「あなたがた、と共に憩いを得る」。
- 下線部は一語で^ギスナアナパオウマイ・・・自分ひとりで休みを楽しむのではなく、誰かを連れ立って、あるいは誰かのところに行き、その人と一緒に安息の時を持つという意味。英語訳聖書の中には、「共にリフレッシュされますように」と訳すものもある。
- パウロは、ロマ1:12では、次のように願っていた。「あなたがたの間で」、すなわち、ローマの教会に行き、ローマの信者たちと親しくいっしょに時間を過ごす中で、「あなたがたと私の互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです」・・・信者同士の交わりは、ともに励ましを受け、ともにリフレッシュされるので、とても大切なことである。

- (6) 祈りの内容の3つ目には、「神のみこころにより」が付けられている・・・原文を直訳すると「神のみこころを通して」。神のみこころがなされますように、という意味。これは、私たち信者が祈るときに持つべき心構えである。パウロは、常に、神のみこころがなされるようにとの願いを持っていた。そして自分の祈りが答えられるとき、それは神のみこころがなされるような仕方においてである、と理解していた。

3. II コリ 1:11 あなたがたも祈りにおいて協力してくれれば、神は私たちを救い出してください。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

(1) 背景

- ① コリントの教会は、パウロの第2次伝道旅行により形成された教会
- ② パウロは第3次伝道旅行の中で、コリントの教会に宛てて手紙を書いた。第一の手紙はエペソに滞在中に、第二の手紙はマケドニア、おそらくピリピに滞在中に書かれた。
- ③ II コリ 1:8「アジアで起こった私たちの苦難」とは、エペソを含む小アジア、現在のトルコ地域における伝道での苦難を指している。

(2) 祈りの位置付け

- ① パウロを使徒として立て、伝道旅行をさせて、福音を伝え、各地に信者の群れを起こすことは、神のご計画であった。そして、そこで起きる多くの苦難や危険からパウロを救い出すのも、神のみこころであり、神のみわざである。
- ② しかし、神がパウロを救い出すためには、祈りが必要であった。
 - まず、パウロはじめ伝道旅行の一行による祈り。9節、「私たちが自分自

身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となる」こと、神に頼るとは、具体的には、神に助けを求めて祈ることである。

- 次に、コリントの教会はじめ信者たちによる祈りの協力である。11節、「あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを助け出してくださいませ」。

(3) 祈りの内容：下線部の「祈り」は、**ギ**デエーシス、願い求め。ここでの祈りの内容は、苦難からの救出、いろいろな必要が満たされるように、との願い求め。

(4) ここから教えられること

- ① 福音宣教のためには、直接奉仕する宣教師や教師が祈ることはもちろんであるが、信者たちが背後で祈ることが不可欠である。祈ることは、宣教活動に参加していることと同じである。
- ② 福音宣教のためには、危険や苦難から救い出されるだけでなく、さまざまな必要が満たされる必要がある。祈りを通してその必要も満たされる。11節、「そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。」

4. II コリ 9:14 そして彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた、神のこの上なく豊かな恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになります。

(1) 祈りの内容：下線部の「祈り」は、**ギ**デエーシス、願い求め。ここでは、エルサレムのユダヤ人信者たちが、コリントの異邦人信者たちのために、願い求める祈りをしていた。

(2) 祈りの結果：エルサレムのユダヤ人信者たちは、会ったことのないコリントの異邦人信者のために祈ることを続けていると、「慕うようになる」。つまり、コリントの異邦人信者たちに会いたくなる、ということ。

(3) この箇所から学ぶこと・・・私たちが誰かのために祈るなら、私たちの心は、その人に会いたい、その人と交わりを持ちたいと思うようになる。これは、誰かのために祈ることの必然的な副産物である。

5. II コリ 12:7~8 この啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高慢にならないように、私を打つためのサタンの使いです。この使いについて、私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。

(1) 祈りの内容：癒しを求める祈り。下線部の「願いました」、**ギ**パラカレオウ、近くまで行く、あるいは呼び寄せるというのが原意で、声をあげて懸命に要求するというニュアンスをもつ「願う」である。パウロは、自分の病弊を癒してくださるようにならぬに三度も懇願した。

- (2) 祈りの答え：癒されず、パウロはその持病を持ったままであった。それについて、神はどのようにパウロに言われたか。
- ① ✖ あなたの信仰が足りないので、癒されない。
 - ② ✖ あなたが「必ず癒される」という前向きな告白をしないので、癒されない。
 - ③ ○ 「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに現れるからである。」
- (3) 信者の祈りに対して、神は時折、「そうしない」と言われる。それは、信者の信仰が不十分であるとか、必ず祈った通りになると宣言しないからである、とかではない。そうしないことが、神のみこころなのである。
- (4) パウロの場合、持病を持ち続けることを神はよしとされた。それは、パウロを高慢にさせず、謙遜に保つためであった。そして、それが必要なほどに素晴らしい啓示が、神からパウロに与えられたからであった。
- ① パウロは使徒であるだけでなく、奥義の管理者である。
 - ② 奥義とは、旧約聖書では明らかにされていなかったが新約聖書で初めて啓示されたことを指す。新約聖書には、全部で「奥義」が10ある。
 - ③ 新約聖書27巻、そのうち書簡は21巻。書簡のうち、13の手紙はパウロによるものである。その中で、パウロは神から啓示された奥義を記している。
- (5) ここには、祈りの原則と合わせて、もう一つ重要なことが教えられている。それは、「神の力は、信者の弱さのうちに完全に現れる」という原則である。パウロは、癒されなかったが、この神の原則を受け取った。
- ① II コリ 12:9 「ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」・・・キリストの力におおわれるためには、自分の弱さを恥じたり、隠したりしてはならない。
 - ② II コリ 12:10、「ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いときこそ、私は強いからです。」・・・キリストの力におおわれる体験をした信者は、自分の弱さが明らかになったとき、侮辱されたとき、苦悩に陥ったとき、迫害を受けたとき、いろいろな困難にあったとき、それを喜ぶことができる。なぜなら、そのようなときにこそ、キリストの力を体験するからである。「私が弱いときこそ、私は強い、キリストのゆえに」と知っているからである。